心に残る、一冊

それぞれの「想い」と
それぞれの「一冊」。



大西 禎子 司書　追分公民館図書室



『モモ』

ミヒャエル・エンデ 作　　大島 かおり 訳

昭和51年に初版が刊行されたロングセラー。

私が学生時代、児童文学を勉強していた頃「好きな本を一冊持ってくる」という宿題をきっかけに出会いました。当時ベストセラーで、話題になっていたのを覚えています。

人々が「灰色の男たち」に時間を奪われる中、人の話をじっくりと聞くモモが、人々の時間を取り戻していく物語で「コスパ」や「タイパ」の対極にあるようなお話です。

映画を早送りで見て、リニアモーターカーで旅をして、そうして節約した時間は、一体どこへ行ってしまうのか。今こそ、たくさんの人に読んでもらいたいと思っています。

河野 真由美 司書　追分公民館図書室



『長い冬』

ローラ・インガルス・ワイルダー 作　谷口 由美子 訳

アメリカ開拓時代の小さなまちを舞台に、長く厳しい冬に立ち向かう一家を描いた物語。大自然の中で食料や燃料が不足する中、家族やまちの人たちが力を合わせて、その冬を乗り越えていきます。

この本は「乗り越える力」を感じさせてくれて、苦しいときやその時期が終わったあとに読みたくなる一冊。年に１回は読んでいます。

人は生きていく中で、その時々に出会う本があると思います。本との出会いも、人との出会いと同じで、巡り合わせなのかもしれません。

そのときは何気なく出会った一冊が、じわじわと、一生、自分の側に残っていくこともある。

私にとって、それが「長い冬」です。

澤田 彩乃 司書　まなびお図書室



『天国での暮らしはどうですか』

中山 有香里

お世話になっていた先輩を亡くし、気持ちが沈んでいたとき、たまたま目に入ったのがこの本でした。題名にも惹かれ、手に取ったのを覚えています。

亡くなった人や動物たちの物語を通して、大切な存在との別れや、残された人たちとのつながりを感じさせてくれるオムニバス形式のお話は、漫画のように描かれているので、お子さんでも読みやすい一冊です。

この本を読んで「亡くなった先輩も、向こうの世界からこちらを見てくれているのかもしれない」と思えるようになりました。悲しみがなくなったわけではありませんが、そう考えることで気持ちに区切りをつけ、前を向くことができました。

読んでいなければ「寂しい」「会いたい」という気持ちだけで終わっていたと思います。